

俳句・短歌から見る日系移民の姿（1930年～1960年）

——ハワイ島を中心に——

高 木 眞 理 子

1. はじめに

日本から北米、南米、アジア各地へと向かった多様な移民の流れの中で、ハワイ移民の歴史は古い。その歴史の始まりは1868(明治元)年にハワイに到着した150名余の元年者からであり、定期的に移民船がハワイに通うようになったのは、明治日本とハワイ王国の両政府間の取り決めに従って1885年に官約移民が始まってからであった。官約移民の第1回船から第26回船でハワイへ渡航した日本人は2万8000人ほどであった。その後は民間の移民会社を通じて1894年から1899年の間に渡航した私約移民が約4万6000人、さらに1900年に公式にアメリカの準州となってから1907年までの自由移民時代に約6万8000人余が海を渡った。そして1908年の紳士協約以降1924年移民法(排日移民法)発効以前に渡航した所謂呼び寄せ移民は約6万2000人であった。これらの日本人移民の多くが、まずはハワイ諸島に散在した砂糖蔗プランテーションで働いた。当初錦衣帰郷を夢見ていた日本人であったが、その夢を果たせないままハワイに定着した者も多い。彼らは各地で中小商店を開いたり、様々な形で農業に従事したり、都市に出て賃労働に従事するなどして地歩を築き、1920年代にはその人口は10万人を超えた。1900年から1950年までは、ハワイの全体人口の約40パーセントを日系人が占めていた。

1930年代になると、ハワイの日系コミュニティは安定期を迎え、1935年には官約移民五十周年を盛大に祝った。その後は日米関係が悪化し、日米戦争の勃発でハワイの日系コミュニティは苦難の時を迎えた。しかしそれを乗り越え、戦後は

高等教育を受けた二世が政財界、法曹界などに進出した。成功者を多く輩出した日系コミュニティは、1968年に元年者移民百年を祝い、約20年後の1985年には官約移民百年を祝った。そして21世紀を迎えた今、ハワイに住む日系人は、三世、四世が中心となり、アメリカの州ハワイの住民として、社会のあらゆる方面で活躍をしている。

ハワイ日系移民の歩みは、移民五十周年や百周年という節目ごとに、ハワイ日系コミュニティのリーダーたちによって書かれてきた。元年者移民百年のころまでは移民一世や日本語の達人な二世が健在であったので、日本語でいくつもの記念の書物が出版された。しかし官約移民百年を迎えた1980年代には、日本語の出版物と並んで、移民一世の歩みを後に続く若い世代に伝えるため、英語による「移民史」が複数出版された。時代が下るに従って、日系の移民史は、移民当事者が綴る歴史記録から、後続世代が移民世代の経験した勤勉・努力・苦難の時代を忘れないでいるために残す英語で書かれた歴史書になってきている。そのような中で、当初日本語で書かれてきた移民の記録でさえも、今の三世・四世以降の英語世代にとっては「読めないもの」になっている。

また、あらためてこれまで書かれてきた移民の歴史・記録を見ると、そこに書かれていない重要な部分があるようにも思えてくる。亡くなった一世が残した日本語による記録のうち、一世の書き残した移民史に著されなかったいわゆる個人的な資料の中には、実は過去を生きた人々の真の心情を語る声となりうるものがまだ隠されているのではないか。たとえば日本語の日記や書きとめられた俳句・短歌などは、その作者自身さえ個人的な

「取るに足りないもの」として扱っている場合も多く、その作者の死とともに忘却のかなたに追いやられてきたものも少なくないだろう。しかし、移民当事者や二世の世代の間では歴史の資料としては評価されてこなかったものによってこそ、浮き彫りにすることができる、当時の社会を生きた人々の姿があるのではないだろうか。

小論では、当時を生きた人々が身の回りの出来事や自然の美などを題材にして詠んだ俳句や短歌といった作品を通して、過去の日系コミュニティの姿を見てゆきたい。文学作品として俳句や短歌を見るのではなく、あくまで「当時の状況、人々の考え」を伝える資料としてこういった作品を見てゆくということをあらためて強調しておく。

さらに小論ではあえて、第二次大戦前まで日系人口の比較的多かったハワイ島の人々の生活を描写した作品を通じて、ハワイ島の日系人の日常を描いてみたい。それはヒロ市を含むハワイ島、すなわち別名ビッグアイランドとも呼ばれるこの大きな島が、日系人口の多い土地であったことと、日本の文化活動の点でも、20世紀の初めという極めて早い時期に定型俳句の結社ヒロ蕉雨会¹⁾を誕生させ、さらに短歌結社の銀雨詩社をその20年後に生み出すという画期的な事実と結びつく場所だからである。

2. 戦前のハワイ島：日系人が多く住んだ島

A) 統計から見るハワイ島日系コミュニティ

官約移民が始まった1885年から15年たった1900年、ハワイの日系人人口はどのくらいであったのだろう。一般的な統計によると1900年当時ハワイ全島の人口が約15万4000人でありその39.7パーセントにあたる6万1000人余が日系人であった(Nordyke 1989, 178-181: Table 3-1)。そしてそのうち2万3300人余がハワイ島に、1万5400人余がオアフ島に住んでいた(飯田2003, 18)。これは、日系人の38.2パーセントがハワイ島に、25.2パーセントがオアフ島に住んでいた計算になる。また、この時期ホノルル市に住んでいた日系人は6100人余で、全日系人の10パーセントくらいであった。つまり、1900年当時、日本

人移民は移民先として割り当てられた砂糖蔗プランテーションで働いた後、砂糖蔗の小作や他の商品作物の生産に従事したり、また単身の男性日本人労働者のための賄い、洗濯業に従事したり、風呂屋などに転業していたが、多くがまだ農村部に留まっていたことを示している。そして、官約移民から私約移民の時代には、ハワイ島に住む日系人の割合が比較的高かったことが特徴といえるだろう。

官約移民としてハワイへ渡った日本人は、図1(飯田2003, 42: 第2-3図)にあるように各地の砂糖蔗プランテーションに契約移民労働者として送られ、契約年限の間は居住地の移動もできなかった。賃金や労働時間も日本政府とハワイ国政府との間の条約できちんと取り決められていた。しかし、ハワイ王国末期の政治変動によって移民の条約にも影響が及び、賃金や労働条件も移民側に不利に変更されることもあった(王堂&篠遠1985, 23)。その後ハワイには劇的な革命がおりハワイ共和国となった。さらに、アメリカへの併合が1898年にアメリカ連邦議会、ハワイ共和国議会双方によって可決されると、1900年の基本法(Organic Act)の施行によって、ハワイは正式にアメリカの準州(Territory)となった²⁾。

ハワイでは、アメリカに併合されることで従来のような契約労働が禁止となったため、ハワイ居住の労働者はみな契約から解放された。とはいえ、ハワイ各島の農村部にある砂糖蔗プランテーションキャンプに住んでいた日本人契約労働者の中には、契約労働が禁止されたことを知らない者もいたといわれる。しかし実際に自由労働者となってからは、転職・転業をする者が増えたのは事実である(永井1955, 555)。1900年から紳士協約までの自由移民時代の7年間は、新しくハワイへ移民してきた日本人移民の各地への移動に加えて、アメリカへの併合以降ハワイを出て西海岸へ行く者の移動も増えた。また農業以外の職業につく者が増えたためか、オアフ島、特にホノルル市の人口増加が目立った。

オアフ島とハワイ島の日系人人口の変遷を見ると、この二島の違いがわかる。まずオアフ島では

口はハワイ日系人にとって確かにホノルルに次ぐもう一つの中心地であったといっても過言ではない。それではハワイ島の日系人はどのような人々を中心にしてどのようなコミュニティを作り上げていたのであろうか。

B) ハワイ島での暮らし

ハワイ島はまだ活発に活動を続けるキラウエア火山を抱え、その雄大な景観は現在も世界中から観光客を引きつけている。しかし19世紀末から20世紀前半にかけては、島の主要な産業は砂糖栽培であり、この島に多くの砂糖蔗プランテーションが存在したことは前掲の図1からも明らかである。

ハワイ島には標高1248mのキラウエア火山に加え、島を東西にさえぎるように標高4025mのマウナ・ケア山と4169mのマウナ・ロア山が並ぶ。北のコハラコースト側にはコハラ山があり、西側のコナ・コーストにはフアラライ山がある。砂糖プランテーション労働者としてこの島に足を踏み入れた日本人は、過酷な労働の合間にこれらの山を見上げ、その自然と雄大な景色を見つめてきたのである。島の気候はこれらの山によって東西にはっきりと分けられる。すなわち東側のヒロは雨が多いことで名高く、逆に西側のコナは、乾燥した気候である。温暖な気候と大量の水を必要とした砂糖を栽培するには、比較的雨の多い島の東側に多くのプランテーションがおかれたのもうなずける。しかし砂糖に十分な水を供給するために、ハワイ島では用水路を造ったり、長く連なる笕や樋を造ったりして水を確保した。また乾燥した気候のコナは砂糖の栽培には適さなかったが、日系移民が辛抱強く取り組んだコーヒー栽培が次第に軌道にのることになる。

ハワイ島に到着した日本人の移民は、多くが砂糖蔗栽培や製糖工場での仕事に従事しながら各プランテーションのキャンプに暮らした。官約・私約移民の時代には、プランテーションが不便な所にあり、交通手段は馬や馬車、荷物の運搬にロバを使うことも多かったが、1900年以降、ヒロを中心に鉄道が敷かれ、初期こそ台数は多くはなかったが次第に車が普及していった。

ヒロやコナ、そして日本人の多く住んだ町には、各宗派の寺や神社、キリスト教会が建てられ、移民の心のよりどころとなった。各寺社の僧侶や神主、牧師らは日本から次々にやってきた。ハワイで生まれ育つ二世の子供たちに日本語を教えるための日本語学校も早くからハワイ島各地に建てられ始め、その教師は、寺の僧侶が行くところもあったが、日本からやってきた教師もいた。さらにその数は多くはなかったが、アメリカ本土で医学を修めた日本人の医者が日本人患者のために小医院を開業³⁾したり、日本人病院をたてた。また、コナやヒロでは日本語新聞が発行された。移民相手の商店や宿を開業する日本人もいた。これらの人々は、一般のプランテーション労働者のリーダー的な役割を果たした。そして、これらの人々の中から様々な文化活動が生まれてきたのである。1903年⁴⁾にヒロ蕉雨会という雨の多いヒロを象徴するような名の俳句結社を結成し、活動を広げていったのも、日本語新聞関係者や日本語学校教師、寺の住職や神社の宮司といった人々だった。蕉雨会の同人はほぼ毎月持ち回りで同人宅に集まり、句会を開いた。またヒロやホノルルの日本語新聞に句を送った。蕉雨会は当初、定型俳句の会として発足したが、一時期破調が好まれる風潮に染まったこともあったという。しかし結局正調に戻り、「題材も季題もハワイに求めて、実生活に触れた句を尊重する」あり方に徹するようになった。

一方、1923年には短歌の結社である「銀雨会」が、やはりヒロに発足した。銀雨という名も雨の都ヒロにふさわしいといえよう。そして結社の1年後、1925年の1月には歌集『銀雨』を発行している。そこには30名近くの歌人が作品をよせた。

次節では、ヒロタイムス(1971)や中野(1991)、川添(1960, 1968)を参照しながら、ハワイ島の日系人の歩みを簡単にたどりつつ、特に日本語を母語とした移民一世によって詠まれた短歌・俳句を通して、ハワイ島の人々の生活や心情を概観してみたい。残念ながらヒロ蕉雨会が生まれた1900年代初めにハワイ島の日本人によって書かれた短歌・俳句はまだ多く見つけることができ

いない。小論では、入手できた1930年代のヒロ蕉雨会の句会に出された作品や、1920年代に出版された銀雨詩社の歌集、1950年代になってから銀雨詩社や蕉雨会の同人によって出版された歌集や句集を参照することにする。

3. 俳句・短歌が映し出す移民の姿

A) ハワイ島の自然

ハワイ島に住む日系人にとって、銀の糸のように降るヒロの雨、雨が多いからこそ時々顔をのぞかせる美しい虹、そして日々表情を変える海は、自分の心情を描写してくれる身近な風景であった。

銀の雨降る町恋し懐しき

小雨降る夜に君を偲びて

井浦曠野（『銀雨』）

雨そぼる高台に見るヒロの町

夜は美しまたたきの灯よ

増田王穂（『銀雨』）

斜面なるみどりの畑に音もなく

ふはりと浮かぶ七色の橋

本郷くれなる（『銀雨』）

空青し海又青しゆるやかに

波は動きぬ南国の夏 川添慳風（『銀雨』）

日系人はマウナ・ケア山をケア、マウナ・ロア山をロアと呼び、これらの山を日々眺めてよく歌に盛り込んだ。特にマウナ・ケアは常夏の島と呼ばれるハワイで、冬に冠雪する山として知られ、俳句・短歌の中でも雪化粧したケアが描かれた。

如月や椰子越しに見るケアの雪

一星（横山松青『アイカネ』⁵⁾）

雲雀聞くロア山上の小春かな

一星⁶⁾（ヒロ蕉雨会 1935年12月）

ケアに雪見しより蚊帳の別れ哉

豊村（ヒロ蕉雨会 1935年10月）

ケア^{おろし} 嵐 椰子葉鳴らして冬に入る

芙蓉（ヒロ蕉雨会 1934年12月）

また、ロアの噴火も以下のように俳句に詠まれている。

【ロア噴火】

冴え返る七千尺や風の渦

夕鳥（ヒロ蕉雨会 1936年2月）

ハワイ島で火山といえばキラウエア山のことで、巨大なクレーターとまだ熱の残る溶岩（ラバ）、吹き上げる蒸気や煙で有名であり、戦前から観光客が訪れるところであった。

踏めば溶岩に崩る音ありマニニ咲く

芙蓉（ヒロ蕉雨会 1936年1月）

またハワイ人の伝説では、火山の女神ペレがキラウエア山に住んでおり、この女神が来ると噴火をおこすと信じられた。火山活動がないとペレが留守、ペレが眠っていると表わし、地震が続くとペレが来るのでは、と歌句に読み込んでいる。

女神眠る山肌すがし雲の峰

松花（ヒロ蕉雨会 1934年7月）

天に吐くペレの焰や秋立つ日

一星（ヒロ蕉雨会 1934年10月）

ペレの留守果てしなく山眠りけり

一星（ヒロ蕉雨会 1934年12月）

黒南風^{くろぼえ}やペレ来るか地軸日々震ふ

一星（ヒロ蕉雨会 1939年6月）

ペレの神怒りますらしキラウエアの

山なりひびき砂をふらしつ

合志蘇川（『銀雨』）

羽蟻の飛来が噴火の兆候と信じられていたハワイ人の言い伝えに則って詠まれた次のような句もある。

土語に残る噴火の兆や羽蟻来る⁷⁾

一星（ヒロ蕉雨会 1933年9月）

常夏の島ハワイといっても、日本ほどはきりしていないが四季はある。自然の微妙な変化に敏感な日本人は、この変化を楽しみ、歌や句に表現した。特に俳句の世界においては、早川鷗々が『布哇歳時記』（大正2年＝1913年）を出版し、ハワイ独特の自然や風物が季節を表す言葉を紹介した。ここでは四季色とりどりに咲く花が多くとりあげられている。特に小論では、ハワイ島に住む人々に身近であった砂糖蔗畑の蔗の成長や製糖工場（ミル）に注目する。『布哇歳時記』でもいくつかの言葉が砂糖蔗関連として挙げられているが（表1参照）、実際の俳句の中では、季語としてばかりでなくその時の情景としても蔗畑はしばしば登場している。

表1 早川鷗々『布哇歳時記』に見られる
砂糖蔗関連の語

春	砂糖船（砂糖の輸出）
夏	切蔗（蔗を切る）、蔗積（蔗を積む、蔗を運ぶ、ハッピーコウ）
秋	製糖終、二番鋤、新植（種子蔗、蔗の苗）、蔗焼、穂蔗（蔗の穂）、蔗のひこばえ、蔗伸ぶ
冬	製糖始、元葉放（ホレホレ）、蔗秋

若蔗の葉に立つ浪や春の月

花雪（1933年4月）

春光のみなざる蔗の揺れ止まず

花雪（1939年5月）

鯉織蔗打つ波に躍りけり

花雪（1940年5月）

以上の句には広い蔗畑の春の情景が見えるようだ。

蔗切って涼しく丘の燈ともれり

翠明（ヒロ蕉雨会 1940年5月）

カチケンの黒き匂ひや秋暑し

虹山（ヒロ蕉雨会 1940年9月）

蔗積みや声頑丈に陽は強く

紅流（ヒロ蕉雨会 1934年5月）

伐りあとの蔗の芽太く夏は逝く

花雪（ヒロ蕉雨会 1939年9月）

黍焼いて余煙に残る芒果かな

夕鳥（ヒロ蕉雨会 1933年9月）

夏から秋に向けて、蔗伐りが行われるのがわかる。砂糖プランテーションに働いた日系移民労働者は、この仕事をカチケンとも呼んだ。Cutting cane が転じた言葉である。

フルム流る甘蔗夏近き日に乗せて

紅嵐（ヒロ蕉雨会 1938年5月）

蔗切って長蛇の樋や五月晴

一星（横山松青『アイカネ』）

遠方の甘蔗畑の中にして

笥の水の光りてぞみゆ

田中洋月（『流星』）

蔗滓の残る甘きに秋の蠅

豊村（ヒロ蕉雨会 1933年10月）

製糖場の甘きほめきや秋暑し

豊村（ヒロ蕉雨会 1934年11月）

製糖の響^{どよめ}動き止みぬ除夜の鐘

松花（1934年12月）

切られた蔗は製糖場（ミル）に運ばれる。ハワイ島ではフルム（flume）で水とともに砂糖蔗を流して運搬した。日系一世は、これを笥や樋またはフルムと呼んでいた。木製の組み立て式の笥づくりは砂糖耕地の大工の仕事で、日本人の技術が評価されたという（王堂&篠遠 1985, 60）。また工場で蔗を圧搾して粗糖を生産する際、煙突から出る甘い香りは独特で、これも歌に詠まれている。しかしハワイ島でも気候や土が合わず、砂糖栽培に不向きと分かって閉鎖されたプランテーションがいくつかあった。次の句はそんな工場のあとなのだろう。

荒廢のミールの跡や草いきれ

紅流（ヒロ蕉雨会 1934年6月）

また、多くの移民一世は移住当初砂糖プランテーションに働いたが、途中様々な職に変わっていった。しかしながら砂糖一筋の人も少なくなく、彼らの苦労は大変なものであった。

三十年蔗切りし手を見つめけり

一星（ヒロ蕉雨会 1940年5月）

また、ハワイ島は他のハワイ諸島と違い、コナ地方で日系移民を中心にコーヒー栽培が盛んになった。

珈琲の乾く匂ひや鐘霞すむ

紅嵐（ヒロ蕉雨会 1935年1月）

珈琲の花咲く里や静かなる

豊村（ヒロ蕉雨会 1935年4月）

コーヒーもぐ秋の日強き山の色

玉兔（ヒロ蕉雨会 1934年10月）

学費などと島に古身や珈琲採る

夕鳥（ヒロ蕉雨会 1933年11月）

珈琲干す棚板の反る秋日影

玉兔（ヒロ蕉雨会 1934年11月）

コナ地方には夜になると「コナエコー」と呼ばれる不思議な音が聞こえることがあったという。中野（1991）やヒロタイムス（1971）を参照しながら、「コナエコー」の言い伝えをまとめておくと、この音は「深夜の汽笛のような怪音」（ヒロタイムス 1971, 116）で、なぜそのような音がす

るのか真実は明らかではないらしい。「フアラライ山の洞穴に空気の通ずる際に起こる響きである」とか、「海峡の洞穴に波浪とともに風の入る響きともいわれる」（ibid.）という。中野（1991, 130-132）によれば、この音について少なくとも3つの伝説がコナの人々に伝えられているという。どの伝説においても亡霊の「哀声」や、亡霊がならず「汽笛」ということになっている。ハワイ島の俳句や短歌の同人もこのコナエコーについて詠っている。

コナエコー夜の霞に襲ひ来ぬ
夕鳥（ヒロ蕉雨会 1940年3月）
コナエコー月は朧にふけてゆく
夕鳥（ヒロ蕉雨会 1940年3月）

コナに住んで日系社会に貢献をした林医師は、診療のかたわら、日系移民にいろいろな情報を伝えるため「コナ反響」という新聞を発行した。この新聞の名称も実は「コナエコー」からとったのではないか、と言われている。

またハワイにはめずらしいと思われるかもしれない植物をあげておく。仙人掌（サボテン）である。ハワイ島北西部のコハラ地区には、道沿いにサボテンが並んでいる場所がある。ヒロタイムス（1971）にも、プウナフル地区の説明で「ここを北に進むと、道の両側に仙人掌が原をなしている」とある。サボテンは『布哇歳時記』にも取り上げられ、その花も実もよく詠われている。

仙人掌の花に布哇のコナ嵐
玉兔（ヒロ蕉雨会 1934年4月）
仙人掌の花やまばゆく展けける
芙蓉（ヒロ蕉雨会 1937年4月）
仙人掌の甘き芽を囓む野牛哉
玉兔（ヒロ蕉雨会 1934年4月）

最後に自然現象としては最も恐ろしいもののひとつである津波をあげておく。時代は下がるが多くの日系移民にとって辛い戦争が終わった翌年の1946年、ハワイ島ヒロは大規模な津波に襲われた。これはアリューシャン地震が原因で、ハワイ諸島でも特にヒロの被害が大きく、150人以上の人が亡くなっている。その津波を安井昭宗夫妻は高台の家から見ていた。

妻とする朝餉のしばし異様なる
音に驚きわが覗き見る
安井昭宗（『銀剣草』）
悲鳴あぐ人々ありて向ひ家の
人等は我家へ走りくる見ゆ
安井昭宗（『銀剣草』）
常滄き深所もわかず沖辺まで
はるかに広く干潟となりぬ
安井昭宗（『銀剣草』）
向ひ家の裏に砕くる海波は
たきつせなして屋根に打ち上ぐ
安井昭宗（『銀剣草』）
川沿ひにたつ家二軒荒波に
押し上げられてまたくくづれし
安井昭宗（『銀剣草』）

ヒロは1960年にも津波に襲われた。二つの津波はヒロからの人口流出の原因にもなった。

B) 日本への郷愁・ハワイの多文化生活

ハワイに居を移した日系移民は、日本の習慣を多く取り入れた生活をした。しかし時が経ち、多数の一世が定住を決心し家族をはぐくむようになると、ハワイ生まれの子どもに日本語・日本文化を伝えながら、一方で現地の様々なエスニック文化やアメリカ文化を取り入れていたようだ。一世の読んだ俳句や短歌には、外地にありながら日本文化を維持する彼らの姿とともに、実はかなり多文化の影響を受けている生活が垣間見える。

お雑煮をまづ古里の父母に
そなへまつりて祝ふ今日哉
田中洋月（『流星』）
門松や問はでもあるじ日本人
一星（横山松青『アイカネ』）

正月が大きな休みではないハワイでありながら、きちんと日本人として正月を祝っている姿が浮かび上がる。

まま事の母に抱かるる去年の雛
花雪（ヒロ蕉雨会 1933年3月）
雛もなく賤が伏屋に桃盛り
大嶺（ヒロ蕉雨会 1933年3月）

雛人形は高価であり持てない家が多かったのだろう。しかし日本人として祭りを祝っていたことが

わかる。一方端午の節句には意外に多くの鯉幟が
ハワイの空を泳いでいたようだ。

移り住む異郷に端午幟かな
一星（横山松青『アイカネ』）
鯉幟椰子吹く風に泳ぎけり
玉兔（ヒロ蕉雨会 1934年 5月）

現在のハワイでもボン・ダンス（Bon Dance）
として6月から8月半ばまでほぼ毎週末行われて
いる盆踊りは、戦前から日系移民の行事として定
着していたようである。

花笠に月の照る照る踊りの輪
紫洞（ヒロ蕉雨会 1933年 8月）
浴衣着て黄昏の庭を親子かな
雲外（ヒロ蕉雨会 1933年 8月）
レコードの切れ目くずる踊りの輪
一星（ヒロ蕉雨会 1937年 7月）

またお盆には先達の一世移民をしのび墓参りをし
た。

盂蘭盆会夏草の句とパイオニア
夕鳥（ヒロ蕉雨会 1937年 7月）
掃苔や塔婆文字のうすれ居し
東風（ヒロ蕉雨会 1937年 7月）

12月に餅つきをした家は多く、俳句にも詠まれ
ている。

邪魔する子居て餅搗の賑はしく
花雪（ヒロ蕉雨会 1937年 12月）
歳末や小路に響く杵の音
豊村（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）

このように日本の文化を守りながら、ハワイの
日系家族はアメリカやハワイの文化的行事も取り
入れていた。日本にはなくハワイらしい行事と言
えば、5月1日のレー（レイ lei）デーがそのひ
とつであらう。この日人々（女性が主）は色とり
どりの花でつくられたレイを身につける。本来こ
の日はメーデーであり労働者の日であるはずが、
アメリカでは9月のレイバーデーがそれにあたる
ため、この日は「赤」だけでなく多彩な花の色に
彩られる日になっている。

うつくしきレーにまぎるるメーデーよ
紫洞（ヒロ蕉雨会 1938年 6月）

また、ハロウィンはアメリカの子どもたちにと

って楽しい行事であるが、ハワイの日系の間でも
楽しまれていたようだ。

ジャキランテン目をくり鼻をくられけり
夕鳥（ヒロ蕉雨会 1935年 10月）
ハロウィンあけて踏れしパパヤ哉
芙蓉（ヒロ蕉雨会 1935年 10月）
パパイヤの目鼻灯るやハローウィン
紫洞（ヒロ蕉雨会 1934年 11月）

ジャキランテンは Jack-o'-lantern のことでカボチ
ャなどの中身を出して目、鼻、口などの形をくり
ぬき、さらに中にろうそくをともし「提灯」の
ように飾ったものである。ハワイではパパイヤも
くりぬかれていたようである。

12月はクリスマスのものである。町中が賑わい
人々は買い物に走る。そんな中で、救世軍の募金
は師走の風物詩でもあったのだろう。

慈善鍋師走の街の騒音に
紅洋（ヒロ蕉雨会 1937年 12月）

しかし1930年代の句の中には、不況時代のハ
ワイの現実を垣間見せる次のようなものもあつた。

慈善鍋に音なく冬の風冷し
静雅（ヒロ蕉雨会 1934年 12月）

とはいえどんな時もクリスマスは子どもにとつ
ては楽しみな行事で、日系の家族の間でも祝われ
た。

玩具あまた子の枕辺や聖誕会
一星（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）
人形抱いて子は眠りけりクリスマス
一星（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）

大みそかは日本では除夜の鐘が鳴る。ハワイで
も各寺が除夜の鐘を鳴らしたようだ。だがヒロの
港では新年と同時に停泊している船が一斉に汽笛
を鳴らした。さらに賑やかな音を出したのは中国
系移民の爆竹であつた。

除夜の鐘島襲い鳴る響きかな
静雅（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）

除夜告ぐる港の船の汽笛かな
豊村（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）

一斉に鳴る爆竹や除夜の町
玉兔（ヒロ蕉雨会 1933年 12月）

C) ハワイに育む家族への思い・日本に残した家族への思い

ハワイに家族を持つ一世は、ハワイの地に生まれ育つ二世の子どもたちを大事に思い、彼らのために働いた。と同時に、ハワイという遠い土地に住んでいるからこそ、日本に残した両親が次第に年老いていくのを心配した。故郷にいる親を想う歌は多い。

貧ゆゑに事ある毎に便りする
母を想へば悲しみの湧く
安達涼雨（『銀雨』）

旅立ちを気にして母の賜ひける
守袋を見るもなつかし
安達涼雨（『銀雨』）

いたく老ゆ母はひたすら吾れ待つと
妹の便りや秋の行く頃
増田王穂（『銀雨』）

健やかと父の便りも涙ぐむ
筆の跡にも老いませしかと
浦部緑村（『銀雨』）

移住後、何らかの理由で日本を訪れて親に会うことのできる経済的余裕のある人々もいた。俳句や短歌を嗜む人々のほうがそのような余裕に恵まれていたことは否めないが、現在のように自由に行き来できたわけではない。

また会ふ日あるまじ吾れに汝が
さちを祈ると母の言ひ給ひける
田中洋月（『流星』）

ふるさとの母病むと聞き外国に
ある子われはも心和まず
田中洋月（『流星』）

上の句では、母親としてみれば、せっかく帰国した息子と再会してもまたハワイへ戻っていったあとは、自分はまだ二度と会うことはできまいと覚悟しているのがわかる。息子のほうは、ハワイへ戻れば親が病氣と聞いてもおいそれとは帰れない。行き来の難しかった当時、お互いを想い合う親子の気持ちがよくわかる歌である。

一方、ハワイに育っていく子どもに対して親として詠んだ短歌や俳句は多い。いくつか例を挙げしておく。

よちよちと覚束なくも歩を運ぶ
愛らしき児に子犬戯る
落合静雨（『銀雨』）

病みし子の気にしかかれば行く先の
旅の宿にも夢にみし哉
合志蘇川（『銀雨』）

病める児の裸衣取り代へ妻はしも
今日も降るやと空仰き見る
大門赤帯（『銀雨』）

自らが親になってから特に親の恩を感じて詠んだ歌もある。

つくづくと物想ふ我となりにけり
父となる日の近づきければ
宮崎千草（『銀雨』）

腕白の子等いたはりつこしかたの
母をししのべば只涙出づ
宮崎千草（『銀雨』）

子等に明け子等に暮れぬる今の我に
恋しきものは故里の母
上江洲芳園（『銀雨』）

また1930年代になると老境に入る一世も目立ち始めた。そして若い二世や三世の世代が成長していく姿に、移民世代は喜びと同時に不安も感じた。1930年初めてハワイの政界（市郡や準州レベル）に3人の日系議員が当選した。うち一人はヒロの岡多作で、準州下院議員となった。その後30年代を通じて日系議員の数は漸次増加し、1940年には13人に達した。移民一世は日本生まれでアメリカでは「帰化不能外国人」であったため、政治参加はできなかった。それ故、二世の政界進出を一世は心から喜んだ。

【第二世進出】

配膳につきし二世や秋晴るる
静雅（ヒロ蕉雨会 1934年10月）

アメリカ社会で尊敬を得られるような職につく二世が増えていく中で、移民一世と同じようなプランテーション労働に従事する二世が減ることに、一世は喜びを覚えつつも一抹の寂しさも覚えたようだ。一方、アメリカ社会に通用する仕事をしながらも、日本文化を継承していく二世に対して一世は好感を覚えた。



図2 布哇日本人先亡慰霊塔
(2006年著者撮影)

蔗伐りや二世は野良に止まらず

一星 (ヒロ蕉雨会 1939年 8月)

父の国にならう二世の雑煮哉

一星 (ヒロ蕉雨会 1940年 1月)

しかし、二世がうわべは日本文化を理解しているようでも、本当に深いところで理解していないということが露呈することもあり、一世が悲しく思うこともあったようだ。

【第二世の激変を見て】

家に伝ふ名刀は錆ん夏惜しむ

一星 (1937年 5月)

1930年代にハワイで育っていた二世・三世の子どもたちは、二つの言語が混じり合った中で生きていた。日英両語で戦争ごっこをするのを眺める一世の気持ちは、本当は複雑だったのかもしれない。

子等の擬戦うららか英語日本語

一星 (横山松青『アイカネ』)

日本語の三世を想ふ卒業日

一星 (横山松青『アイカネ』)

日系移民一世としてハワイに生きてきた人々は、1930年代には多数の人々が移民当初に比べれば安定した生活をできるようになっていた。ハワイでの苦労の中で亡くなった多くの先達の一世

の努力がなければ今の自分たちはないと考え、感謝の意を表現するようになってきたのも1930年代であったのではないか。

花珈琲初代移民の汗に咲く

芙蓉 (ヒロ蕉雨会 1939年 4月)

芽柳や移民の墓地の鐘が鳴る

静雅 (ヒロ蕉雨会 1939年 4月)

芳草や世に忘らるる移民塚

紫洞 (ヒロ蕉雨会 1934年 4月)

これらの句には、ハワイの土になった日系移民への想いが溢れている。また、前述したようにハワイでは1935年に官約移民五十年を迎え、記念祝賀式をホノルルの日本領事館で祝った。一世にとっては嬉しい祝祭であり、ハワイ島の俳句同人もその心情を詠んでいる。

【在布五十年祝賀会】

草分けの腰伸ばしたる春日かな

紫洞 (ヒロ蕉雨会 1935年 3月)

おもかげ 梯をさそふ日永や移民祭

静雅 (ヒロ蕉雨会 1936年 2月)

ハワイ島ヒロでは、1940年 8月20日、ヒロ郊外のアラエ墓地にて「布哇日本人先亡慰霊塔」の除幕式が行われた。川添 (1968, 336-338) では、1966年のヒロタイムスの記事を元に、この慰霊塔のエピソードを紹介している。この慰霊塔は、ハワイ島コナ生まれの二世で、1930年代にはヒロの警察副署長を務めるようになった阿部三次⁸⁾の発案により、多くの日系人の賛同を集めて建立されたという。下のヒロ蕉雨会同人の句は、建立が決まった頃に詠まれたのであろう。

【祝布哇日本人先亡慰霊塔建立】

日本の石に眠りて涼しなめ

夕鳥 (ヒロ蕉雨会 1939年 8月)

なお、この碑は現在も海を臨む墓地に立っている(図2参照)。

D) 悪化する日米関係と戦中の抑留⁹⁾

1930年代も後半になると日本の中国への侵攻のニュースが入り、ハワイ島に住む日系移民一世はそれを注意深く見守っていた。次第に日米関係の悪化が明らかとなると、一世は不安を感じながら生きることになった。この時期に FBI は親日

一世のリストを作りつつあったのであるが、もちろんリストにのった当事者は知る由もなかった。そして戦争が勃発すると、FBI リストにのっていたヒロ蕉雨会や銀雨詩社の同人の何人もが逮捕・抑留されることになったのである。日本語学校や新聞・社社の関係の仕事についていた者が多く、日本との親密な関係を疑われたことがその理由であった。

1937年7月の盧溝橋事件以降、日本軍が全面的に中国に侵攻すると、ハワイ島に住む日系一世は母国の快挙としてこの動きを喜んでいた。

事変ラジオ夜光花近き窓の風

芙蓉（ヒロ蕉雨会 1937年8月）

事変後は、日本軍の進軍が一世の話題となった。地図を片手に進軍を追っていた姿が見えるようである。そしてハワイからも、出征する日本の親族に千人針や慰問袋を送ったのではないか。

垣をへだてて支那戦談や棕櫚の花

静雅（ヒロ蕉雨会 1937年8月）

染めて行く戦線地図や夜長なる

芙蓉（ヒロ蕉雨会 1937年10月）

支那地図に日の旗埋めつ秋暮るる

一星（ヒロ蕉雨会 1937年11月）

秋晴れや千人針の針光る

芙蓉（ヒロ蕉雨会 1937年10月）

あたたかや慰問袋に吾が血通ふ

一星（ヒロ蕉雨会 1938年5月）

アメリカに長く住んでもアメリカ人にはなれない（帰化不能）日系一世。日米通商条約の破棄は在米の日系人には衝撃であった。ヨーロッパでの戦況もますます緊迫してくると、不安が増した。

【日米通商条約破棄所感】

大日輪太平洋の風涼し

紅嵐（ヒロ蕉雨会 1939年8月）

【日米通商条約破棄を見て】

血迷ふて瓜田に馬を放ちけり

一星（ヒロ蕉雨会 1939年8月）

【日米通商条約破棄】

春雷す日本は遂に無条約

一星（横山松青『アイカネ』）

世は戦晩夏の島に甘蔗太し

静雅（ヒロ蕉雨会 1939年9月）

情勢の変化から外国人居住者の登録も行われた。

【外人指紋登録有感】

此の手此の指吾日本人風涼し

紅嵐（ヒロ蕉雨会 1940年8月）

また、日本へ引き揚げていく者もいたが、改めてハワイに残る決心をする者もあった。

引き揚げの意志なき我に秋すずし

一星（横山松青『アイカネ』）

ハワイでも徴兵令が出て、ハワイ生まれの日系二世が入営していった。

敵とならん子の入営を微笑みつ

一星（横山松青『アイカネ』）

そして在米の日系人が恐れた日がやってきた。

来るものは遂に来たりぬ極月七日

一星（横山松青『アイカネ』）

楽園の冬や地獄に急転化

一星（横山松青『アイカネ』）

ハワイ全土に戒厳令がしかれ、灯火管制が行われた。

闇の街に出ずれば冬の星光る

一星（横山松青『アイカネ』）

冬の蚊の迫る夜もあり消燈下

一星（横山松青『アイカネ』）

日本語が禁止され、日本的なものは生活の表面から消えていった。逆に、アメリカの友軍である中国からの移民は日本人とみられないようにする努力をした。

開戦の伝はるなべに日本語の

使用禁止令に人唾然たり

安井昭宗（『銀剣草』）

時めきし日本衣装は戦争の

声にたちまち姿ひそめし

安井昭宗（『銀剣草』）

支那国民排斥法撤去され

今をときめく支那婦人服

安井昭宗（『銀剣草』）

このような中で、一世同胞が次々と逮捕されていった。だが日系人12万人近くが強制的に内陸部へ収容されたアメリカ西海岸と異なり、ハワイ

で拘留されたのは日系コミュニティのリーダーと見なされた一世や帰米二世合わせて約1800名であった。ハワイから拘留された人々について書き残された記録は多いとはいえない。ハワイ島から監禁されていった人々もおり、そのうち拘留生活について短歌・俳句を残した人は何名かいるが、その作品で出版されているものは多くはない。

【開戦と同時に同胞有志悉く監禁さる】

銃声や犬に迫れし雉子の声

一星 (松青『アイカネ』)

前原一星は逮捕後アメリカ大陸に送られ、ヒューストン (テキサス)、ローズバーグ (ニューメキシコ) そしてサンタフェ (ニューメキシコ) などを転々とさせられたが、その苦しい拘留期間、俳句を「アイカネ」(ハワイ語で友達の意)として乗り切ったのであろう。

同胞一千バブワヤ¹⁰⁾に拝す初日かな

一星 (横山松青『アイカネ』)

潮路越え山路来て雪の配所かな

一星 (横山松青『アイカネ』)

一方、当初敵国日本とのつながりを疑われ、米軍兵士としては不適格として扱われた日系二世兵士は、日系部隊第百大隊を形成しヨーロッパ戦線で活躍をした。その結果、日系志願兵が募集されることとなり、ハワイから多数の二世が志願した。

驚異的に殊勲をたてし百大隊

日系兵士の真価たかまる

安井昭宗 (『銀剣草』)

日系兵士は比類なきもの勲功は

志願兵募集の大運動となる

安井昭宗 (『銀剣草』)

二人子を兵にささげし理由ありて

選ばれ立てる演壇のわれ

安井昭宗 (『銀剣草』)

安井はもともとハワイ島に居住していたが、開戦直後拘束された。しかし病気のため自宅監禁となっている。二人の息子がアメリカ兵士として志願したが、長男は戦死、次男は凱旋した。

在米の同胞吾等戦はむ

敵はあはれに祖国ならずや

安井昭宗 (『銀剣草』)

戦争中の一世の複雑な想いが伝わってくる。

E) ハワイでの労働・船舶のストライキ

1930年代、ハワイでは砂糖蔗を運搬する船舶の労働者や港湾労働者の間で労働組合化が進み、30年代後半にはいくつかの労使紛争が起こった。1936年から7年にかけてのハワイ島のストライキ (罷業) では、船が動かず荷揚げ・荷降ろしが停滞したため、人々の生活に影響が及んだ。

【罷業断行】

ただならぬ海の匂ひや秋曇り

夕鳥 (ヒロ蕉雨会 1936年11月)

秋霖に警吏護衛の荷揚かな

芙蓉 (ヒロ蕉雨会 1936年11月)

罷業者に暮迫る軒や秋の風

紅流 (ヒロ蕉雨会 1936年11月)

【海運ストライキ感】

纜^{ともづな}に藻の伸びてあり春寒き

葉洗 (ヒロ蕉雨会 1937年2月)

罷業終結の号外飛んで街うらら

葉洗 (ヒロ蕉雨会 1937年2月)

蔗運ぶ馬に労資はなかりけり

一星 (ヒロ蕉雨会 1939年8月)

【罷業解決第一船】

掛声もありて西瓜のおろさるる

紅嵐 (ヒロ蕉雨会 1938年8月)

罷業解決西瓜ごろごろ積まれたり

紅嵐 (ヒロ蕉雨会 1938年8月)

そもそもハワイでは、砂糖産業を巨大な5つの企業が独占しており、その下で働く労働者の労働条件は劣悪であった。砂糖産業の労働者の大部分を各国からの移民一世がしめていた時代は、特に労働者間の団結ができず、待遇改善などの運動も生まれにくかった。しかし1930年代になるとハワイ生まれの労働者が砂糖産業の様々な仕事に進出するようになり、アメリカ本土から労働組合の運動家が労働者の組織化を手掛けたのだった。日米戦争の火ぶたが切られると、ハワイでは軍政下の戦時体制になり、労働組合は沈静化した。しかし戦後すぐに組合運動は活性化し、実際1946年には砂糖プランテーションでのストライキ、1949年には海運ストライキを起こし、どちらも成功さ

せた。特に後者のストはハワイの経済を麻痺させ、一般住民の生活を脅かしたことでも知られている。

明けがたき棧橋罷業遂に起り
県民五十余万が買ひ溜めに競ふ
安井昭宗（『銀剣草』）
買い溜めの米すでに無く生きがたき
怨嗟の声は巷に満つる
安井昭宗（『銀剣草』）

ハワイの政治経済的権力を掌握してきた砂糖産業関係者は、組合活動を「共産主義」であるとして世論をあおり、その弾圧をはかった。ちょうど米ソ関係が悪化し、反共ヒステリアがアメリカ中に広がっていたため、ハワイでの反共運動は労働組合つぶしに利用されていった。労働組合員には日系二世も多く、一般の日系人にとって共産批判は日系への批判ともとれ、見過ごすことのできないものであった。ハワイが共産化しているという砂糖産業関係者側の作り上げたイメージのおかげで、戦前から日系の悲願であった帰化法改正やハワイの州昇格（立州）に影響が及ぶかもしれないというおそれが有ったからである。

餓死か赤化か炎天に振ふストのメス
横山松青（『アイカネ』）
朝顔雨にくづれ島民ストに瘦す
横山松青（『アイカネ』）
藪蚊汝も赤化か人の血を肉を
横山松青（『アイカネ』）

F) 日系一世の帰化とハワイの「立州」

ハワイに住む日系住民にとって、アメリカに帰化すること、ハワイが州に昇格すること（立州）はどちらも特別な意味をもっていた。まず、日系移民はハワイに長く生活してきても帰化不能という法律上の立場のせいで政治参加もできなかった。日米戦争の間に中国人が帰化を許されたので、アメリカで帰化不能のカテゴリーに入る国は少数になっていた。帰化法改正については日系二世を中心とする JACL（日系市民協会）の働きもあり、1952年マッカラン＝ウォルター移民帰化法として結実した。あらためて帰化する権利を手にした一世には、帰化するべきか悩むもの、二

世からの贈り物を喜んで受け取るというもの、いろいろであった。

帰化が是か帰化せぬが否か弥生尽
横山松青（『アイカネ』）
六十にして明日なき春の帰化講座
横山松青（『アイカネ』）

【帰化を許されて】

日本人としての名残や雑煮餅
横山松青（『アイカネ』）
帰化講座とは、日系一世や二世が中心となって、帰化試験に必要な知識を教える講座を、公立高校の課外講座や自主的な講座として開き、多くの受験者の試験合格をサポートしたものである。1952年の帰化法発効後、各地で帰化講座が開かれ、多くの一世が参加し、帰化試験に臨んだ。

次に、ハワイの州への昇格は、やはり戦前からハワイ在住の日系人の望みであった。1930年代にハワイで、連邦議会委員会によるハワイの州昇格を審議する公聴会が開かれたが、日系をはじめとするアジア系が人口に占める割合が高すぎる上、ハワイはアメリカ化できていないとされ、州昇格の議論は棚上げにされてしまった。戦時中の二世兵士の活躍などで、日系へのイメージが大きく変化したおかげで、戦後の州昇格への道のりはスムーズかと思われたが、州昇格法案がアメリカ連邦議会における政争の道具にされ、議論は進まなかった。前述した通り、反共ヒステリアの時期にはハワイの共産化が心配され、日系も赤化しているのではと心配された。紆余曲折を経て、ハワイの州昇格が連邦議会で決まり、それが実現したのは、戦後14年もたった1959年であった。

苦難五十年アロハステート生れけり
横山松青（『アイカネ』）
五十年の春待つて得し星一つ
横山松青（『アイカネ』）
太平洋を州におさめて七四祭
横山松青（『アイカネ』）
立洲を悲願といへり米布合併
六十年の後にして布哇
松田淑子（『貿易風』）

4. おわりに

おもに1930年代から州昇格までのハワイ日系コミュニティの姿を、ハワイ島に住んだ日系一世の俳句・短歌を通して見てきた。日本からハワイへ移住し、長年ハワイに住んだ人々の中で、俳句や短歌を嗜んだ人はごく一部であることは事実である。それ故、彼らの歌がハワイに住んだ日系一世の気持ちを代表しているわけではない。しかし、これらの歌には実際に当時生きた人の気持ちがあふれている。これらの歌を歴史的資料として語らせるという作業もこれから重要なのではないか。今後ぜひとも1900年代から20年代までにヒロ蕉雨会や銀雨詩社の同人によって詠まれた作品をできるだけ多く収集し、より深い考察をしたい。

付記

小論は平成18年度科学研究費補助、基盤研究C（一般）「俳句、和歌、川柳を媒体に表象されるハワイ日本人移民の社会史的文化的研究」（研究代表 島田法子）の研究成果の一部である。

また、著書は大学では北山真理子として教鞭をとっているが、本紀要では研究上の名前である高木真理子の使用を許可していただいた。ここに感謝の意を表したい。

注

- 1) ヒロ蕉雨会は、海外で最古の俳句結社ではないが、今日でも句会を続けているという点で、注目に値する会である。
- 2) ハワイ在住の日本人は、Territory を県と表記したため、ハワイの日本語文献ではハワイ県と書かれた。
- 3) ハワイ島では1892年に林三郎医師がホノムに医院を開業した。林医師はその後コナに医院を移し、それから50年間コナの日系移民の診察にあたった。林医師は1897年から自ら「コナ反響」という新聞を発行したことで知られる。
- 4) 川添樫風は『移植樹の花開く』の中で、ヒロ蕉雨会を扱った章では1903年発足と書いているが、同じ本の中で、横山松青の『アイカネ』に関する章では、ヒロ蕉雨会について1904年発足と書いている。
- 5) 前原一星はヒロ蕉雨会の同人で長く多くの作品を発表してきた。戦時中の拘留後、ホノルルに移り、そこで改名し横山松青とした。1960年に戦前の一星時代からの作品をまとめ『アイカネ』として出版している。小論では『アイカネ』所収の句でも、戦前の作品は一星の作品とした。
- 6) ヒロ蕉雨会の句集には、俳句と雅号しか書かれていないため、小論でも雅号のみ使用する。
- 7) 戦前の日系人の間では、ハワイの先住民は、「土人」「カナカ」と呼ばれていた。前者は今日の視点に立てば、蔑視語に当たるかもしれないが、歌・句に読み込まれている場合はそのまま表記する。
- 8) その後阿部は準州議会議員に立候補し当選した。しかし日米戦争勃発後拘留されている。
- 9) 戦中の抑留というテーマについては、ハワイから本土に抑留された複数の人々の残した俳句・短歌を整理してより深い考察がなされるべきである。小論では、ハワイ島在住の横山松青の句を中心に考察したとどまっている。
- 10) バブワイヤーとは Barbed Wire、つまり収容所のまわりにはられていた有刺鉄線のことである。アメリカ西海岸に住んでいた12万ともいわれる日系人が内陸につくられた10か所の転住所に強制移住させられたことは、多くの日系二世、三世によって明らかにされ、アメリカ大統領の謝罪を得ている。一方、一星らのように愛国的敵国人として敵性外国人収容所に入れられた人々もいたのである。

文献表

〈短歌集・俳句集〉

銀雨詩社『銀雨』布哇毎日社、1925年

『ヒロ蕉雨会句集』（村上紅嵐）ハワイ大学ヒロ校図書館蔵

ヒロ蕉雨会句会

1932年11月

1933年1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12月

1934年1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12月

1935年1, 3, 4, 8, 9, 10, 12月

1936年1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12月

1937年1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12月

1938年1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12月

1939年1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11月

1940年1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12月

ヒロタイムス編『ハワイ島日本人移民史：移民百年記念』ヒロタイムス、1971年

本郷紅（恒子）『ベンダの花びら 本郷紅遺稿集』大塚印刷所（非売品）、1969年

松田淑子『歌集 貿易風』新曜社、1958年

田中洋月『歌集 流星 田中洋月遺稿』、尾崎音吉編、田中洋月遺稿刊行所（非売品）、1940年

俳句・短歌から見る日系移民の姿（1930年～1960年）（高木）

横山松青（戦前の名 松原一星）『松青句集 アイカネ』青夏吟社（非売品）、1955年

安井昭宗（里助）『銀剣草』短歌雑誌編集部（非売品）、1950年

〈参考文献〉

早川鷗々『布哇歳時記』1913年

飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地図』ナカニシヤ出版、2003年

川添善市（樞風）『移植樹の花開く』移植樹の花開く刊行会、1960年

川添善市（樞風）『移民百年の年輪』移民百年の年輪刊行会、1968年

Kumei, Teruko. Crossing the Ocean, Dreaming of America, Dreaming of Japan: Transpacific Transformation of Japanese Immigrants in Senryu Poems; 1929-1941. *The*

Japanese Journal of American Studies, No. 16, 2005, 81-110.

永井松三編『日米文化交渉史 5 移住編』（助開国百年記念文化事業会、洋々社、1955年

中野次郎『ハワイの医師林三郎伝 ジャカランダの道』第一法規出版、1991年

Nordyke, Eleanor C. *The Peopling of Hawaii, Second Edition*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1989.

王堂フランクリン、篠遠和子『図説ハワイ日本人史 1885-1924』ピショップ博物館出版局、1985年

篠田佐多江「ハワイ歳時記にみる文化変容①新年の季語について」『東京家政大学生生活資料館紀要』第2集、1997年、57-75.

篠田左多江「黎明期のハワイ日系日本語文学——尾籠賢治を中心に——」『移民研究年報』第13号、2007年、41-57.